

若きミルトンのシェークスピアへの憧憬

—*On Shakespeare* 考察から見える模倣の芸術—

常 名 朗 央*

Young Milton and Shakespeare

JONA Akio*

Abstract

John Milton's first published poem, *On Shakespeare*, anonymously appeared under the title, *An Epitaph on the Admirable Dramatic Poet W. Shakespear*, in the second folio of plays by Shakespeare (1632). Thanks to his father's strong connection to the publishers of the second folio, young Milton, as a talented but unknown poet, had the honour of his contribution. It is evident that *On Shakespeare* imitates an epitaph by Shakespeare, *An Epitaph on Sr Edward Standly. Ingraven on his Toombe in Tong Church*. This paper is a comparative study of *On Shakespeare* and the Shakespeare-written epitaph: especially similar expressions of both works, Star-pointing pyramids and SKY ASPIRING PIRAMIDS.

キーワード：ミルトン，シェークスピア，スタンリー伯，碑文，シェークスピア頌詩

Keywords : Milton, Shakespeare, the Stanleys, epitaph, *On Shakespeare*

1. はじめに

17世紀の英国詩人ジョン・ミルトン(John Milton.1608-74)の *On Shakespeare* (1630)は、自身の詩集(1645)の出版に先立って初めて世に出た作品として注目される。これはミルトンが22~23歳の時、ケンブリッジ大学でM.Aを授与された頃に書かれたものである。この *On Shakespeare* にはモチーフとした題材が存在する。それは、イングランドのシュロプシャー州(Shropshire)の教会の墓地に刻まれた碑文であり、これらを比較することで、ミルトン及び彼の父親とシェークスピアとの深い関係が浮き彫りになる。本論では、*On Shakespeare* と教会の碑文(epitaph)の翻訳と作品解釈を行い、両作品にある語彙や内容の共通性を見

出し、ミルトン一家とシェークスピアとの関係を考察する。さらには17世紀には古風な表現とされていた Star-pointing という語を何故ミルトンが敢えて使ったのかを考えてみたい。

2. ミルトンの父と出版界

シェークスピアの Second Folio が第一版の改訂版として出版されたのは第一版の9年後の1632年のことである。当時イングランド第一の詩人・劇作家であったシェークスピアの全集に、若きミルトンが祝辞としての詩を載せることができたのは、常識的に考えて不自然である。学識は十分に認められていたものの、当時M.Aを授与されたばかりの若者は、世間的にも無名であり詩人としての地位を確立してはいなかった。その答えは当時のミルトンの父親(John Milton、父親と同名)が出版界、及び演劇界

*工学部英語系列非常勤講師 Part-time Lecturer, Department of English Language, School of Engineering

に強い関わりがあったことにある。

シェークスピアの *First Folio* には *epitaph* が載せられていて、作者は匿名で *I.M.* とだけ記されている。*Second Folio* のミルトン作の詩も匿名であったが、当時中世から近世にかけての欧州では、出版された詩集への祝辞は匿名で送ることが一般的であった。*First Folio* に寄稿した人物に関しては、*Jasper Mayne*、*John Marson*、有力な説ではスペイン研究家の *James Mabbe* などが挙げられる。*Gordon Campbell* はここにミルトンの父親(*John Milton*)の説を唱えている。以下は *Campbell* の説に準拠するが^①、まず、ミルトンの父親の作とされる現存の詩は 2 作ある。出版されることはなかったが、6 行の *epitaph* と *John Lane* のソネット集 *Lydgate's Guy Earl of Warwick* の裏表紙にソネットを寄稿している。共にお世辞にも上手とは言えない作品とはいえ、ミルトン父は詩を執筆する一応の素養は持ち合わせていたといえる。ミルトンの父が詩人としての素養は申し分なかった自分の長男にも何らかの形で作品を世に出す機会を与えたかったとしても不思議ではない。

次に父ミルトンと作曲家の *Thomas Morley*(1557-1602)との繋がりである。*Morley* は、*A plaine and easie Introduction to Practical Musicke* など有名なイングランドの音楽理論家、歌手、オルガン奏者であり、シェークスピアとロンドンの *St Helen's Bishopsgate* で同じ教区民であったという。実際に演奏されることはなかったというが、シェークスピアの *As you like it* に *Morley* の *It was a lover and his lass* が劇中歌として作られたことから、シェークスピアとの関係は深いことが伺える。その *Morley* は作曲家でもあったミルトンの父の後援者であり、ミルトンの父が作曲した曲集の出版を手助けしたという経緯がある。このことからミルトンの父とシェークスピアに何らかのつながりがあり、*First Folio* に載せられた詩がミルトンの父の作かという真偽はともあれ、出版界と音楽界に強いコネがあったことは容易に想像できる。

また、ミルトンの父は *Blackfriars Theatre* の *trustee*(保管人)であった。*Blackfriars* とはロンドン中心街にある地名であり、そこに隣接して建てられた劇場が *Blackfriars Theatre* である。同劇場で

シェークスピアは座付作家をしていて、*King's Men*(王国一座)の講演では俳優もしていた。ただ問題なのが、*trustee* は *gentlemen* でないとなれない慣習であったが、*gentlemen* の地位がなかったミルトンの父がなぜ就任したかは不明である。ミルトンの父は音楽家である以上にロンドンでは一流の *scrivener*(公証人)として活躍していた。これは不動産管理のような仕事であり、また手広く金貸しの仕事もしていたので経済的にかなり裕福であった。長男のミルトンがイタリアに留学できたり、次男のクリストファーが判事(後にナイトの称号を得る)になれたりしたのは、父親の経済的背景によるものである。但し、ミルトンの父が *trustee* になったのは、経済的な恩恵以上に *trustee* の役職を得ていれば、その劇場の芝居に役者として出演できるという「特権」があったからともいえる。芸術的素養があった父がその地位に就いたのは自然であり、長男のミルトンがその「特権」を利用し芝居を楽しんだ様子は、友人の *Charles Diodati* にしたためたラテン語の詩^②に載せられている。

ミルトンの父は経済的に成功し、芸術(音楽・文学・芝居)への関心が高かった故、長男のミルトンが文学的才能を開花させる環境は十分に整っていたといつてよい。父ミルトンは長男にケンブリッジで *M.A.* を得た褒美として *Second Folio* に詩を載せる機会を与えたのではないか。後にミルトンが当時の心情を回想しているので紹介する。「わたくしが多くの言語に精通し、哲学の甘い実をじっくりと味わった後、父はわたくしをケンブリッジに入学させたのであります。そこで七年間、わたくしは廉直のひとすべてに認められ、一中略一文字通り「称賛の言葉」とともに {優等で} 修士号を獲得したのであります。」^③以上が *On Shakespeare* 執筆の背景であるが、次は *On Shakespeare* と碑文の作品解釈と、何故ミルトンが教会の碑文をモチーフにしたのかを考えてみたい。

3. Stanley 家の碑文

以下が *On Shakespeare* の参考となった教会の碑文の全文と全訳である。碑文は原文のまま大文

字で表記する。日本語訳は筆者による。

ASK WHO LYES HEARE, BUT DO NOT
WEEP

HE IS NOT DEAD, HE DOOTH BVT
SLEEP

THIS STORY REGISTER, IS FOR HIS
BONES

HIS FAME IS MORE PERPETVALL THE
THEISE STONES

AND HIS OWNE GOODNES, Wt HIS
SELF BEING GON

SHALL LYVE WHEN EARTHLIE
MONAMENT IS NONE

(on the east end of the tomb)

NOT MONV[M]ENTALL STONE

PRESERVES OVR FAME

NOR SKY ASPYRING PIRAMIDS OVR
NAME

THE MEMORY OF HIM FOR WHOM THIS
STANDS

SHALL OVTYVE MARBL AND DEFACERS
HANDS

WHEN ALL TO TYMES CONSVMPTION
SHALL BE GEAVEN

STANDLY FOR WHOM THIS STANDS
SHALL STAND IN HEAVEN⁽⁴⁾

(on the west end of the tomb)

(memorial verses carved into the stone for
the Stanley family, Collegiate Church of St
Bartholomew, in the village of Tong, in
Shropshire)

(ここに誰がいるか尋ねて 泣いてはいけな
い / 死んではない ただ眠っているだけ /
ここにいるのは その姿を記すため / かの名
声はその石像よりも永遠である / そしてその
徳は 姿が消えても / 地上の記念碑が無くな
っても 生き続ける) ⁽⁵⁾

(on the east end of the tomb)

(どんな記念碑も我々の名声を維持できず /

空にそびえる尖塔も我々の名を維持できず /
かの人への思い出は / 時の流れで汚れた手や
大理石よりも生き続ける / スタンリーその人
は 天にそびえたつ)

(on the west end of the tomb)

Collegiate Church of St Bartholomew はイング
ランド中西部の Shropshire 州にある聖堂参事会管
轄の教会であり、ディケンズの『骨董屋』(*The
Old Curiosity Shop*)で Little Nelle が亡くなり埋
葬された場所として「聖地」となっている。この
教会で埋葬されている Stanley 家の墓石に記され
ているのが上記の碑文である⁽⁶⁾。東側の碑文はダ
ービー伯 Sir Thomas Stanley とその妻 Margaret
Vernon の墓所にあり、西側の碑文は Vernon 家の
最後の後継者 Sir Edward Stanley の墓地にあ
る。ここで東西両碑文の制作年代だが、ミルトン
が *On Shakespeare* を執筆したのは 1630 年、
Thomas Stanley が死去したのは 1576 年、
Edward Stanley が死去したのは 1632 年である。
ミルトンは両方の碑文を参考にして *On
Shakespeare* を執筆したので、これらの碑文は
別々の作品としてではなく、同時期に彫られたも
のであると考えるのが妥当である。つまり、碑文
は Thomas Stanley に送られたとすべきであら
う。Edward Stanley が死去した後で碑文が彫ら
れたとしたら、両碑文を参考にして *On
Shakespeare* という説が崩れるからである。

碑文は墓碑銘としての体裁は整っているもの
の、内容は平凡でありきたりである。ただ、詩と
しての芸術性を抑えて故人を悼むものとしては及
第点といえる。それでも前半では故人を HIM や
HIS と呼び、最後に Stanley と呼びかける手法は
お世辞にも上手とは言えず、*On Shakespeare* の
ように出だして相手に問いかけるほうが追悼の効
果が高いと思われる。

これらの碑文が実際にシェークスピア作品であ
るかどうかは結論が出ていない。本人の作ったも
のであるという根拠は、作品の類似性に依る。例
えば、シェークスピアのソネット 55 番にある
“Not marble, nor the gilded monuments / Of
princes, shall outlive this powerful rhyme; / But

you shall shine more bright in these contents /
Than unswept stone besmear'd with sluttish
time”.⁽⁷⁾「王達の大理石の像も、輝く記念碑も、こ
の力強い詩より長く生き残ることはない。君はこ
れらの詩句のなかで光輝く、時の流れに汚れた石
像などよりもっと長く」⁽⁸⁾(*Sonnet 55*. 1-4)の箇所
である。石のモニュメントよりも長く生き続ける
という内容と、monument、outlive、stoneなど
の使用語句に共通性が見られる。次の例としては
リチャード2世の“Of sky-aspiring and ambitious
thoughts”⁽⁹⁾「天に舞い上がらんとする傲慢不遜な
野心と」⁽¹⁰⁾(*King Richard II*. Act 1. Scene 3. 197.)
が碑文の“SKY ASPYRING PIRAMIDS”「空にそ
びえる尖塔」と酷似している点がある。真偽は新
たな資料を待たねばならないものの、重要なのは
ミルトンがこれらの碑文をシェークスピア作とし
て取り入れたことである。

ミルトンがこれらの碑文を自作のモチーフにし
たのは2つの理由からなる。一つは、取り上げる
詩人の他の作品をモチーフとして取り上げることは
当時はよく見られる行為であったこと、もう一つ
は、Stanley家は芸術のパトロンであり
Blackfriars Theatreを支援していたため、芸術を
擁護する貴族への賛辞の意味もあった。後に、ミ
ルトンが仮面劇*Comus*をラドロウ城で上演した
際に招いた貴族の中にはStanley家の人間⁽¹¹⁾もい
た。

4. *On Shakespeare*

Second Folioに載せられた*On Shakespeare*は、
ミルトン最初の世に出た作品である。スタンザは
古典の形式に則ってはいないが、脚韻は2行ずつ
揃えている。以下が全文と全訳である。和訳は筆
者による。

What needs my Shakespeare for his
honour'd Bones,
The labour of an age in piled Stones,
Or that his hallow'd reliques should be hid
Under a Star-ypointing Pyramid?
Dear son of memory, great heir of Fame,

What need'st thou such dull witness of thy
name?

Thou in our wonder and astonishment
Hast built thy self a lasting Monument;
For whilst to th' shame of slow-
endeavouring art,

Thy easie numbers flow, and that each part
Hath from the leaves of thy unvalu'd Book,
Those Delphick lines with deep impression
took,

Then thou our fancy of her self bereaving,
Dost make us Marble with too much
conceaving;

And so Sepulcher'd in such pomp dost lie,
That Kings for such a Tomb would wish to
die.⁽¹²⁾

On Shekespeare(1630)

(我がシェークスピアは、崇められる亡骸のため
に / なぜに、石積むのに、一代の労役を必要
とするか / それとも、なにゆえにその聖なる
遺体を / 星を指さしてそびえる尖塔の下
に、隠さねばならぬのか / 「記憶」の女神の
愛児、「名声」の偉大な後継者よ / その英霊
のはかない証を、あなたはなぜに要するか /
我らの驚嘆と驚きのさなかに、すでに、 / あ
なた自ら、永世の墓碑を築いている / という
のは、遅筆で難渋する、技巧を恥じらわせて
 / あなたの流麗な詩はよどみなく流れ、こよ
なく貴い / あなたの書巻のなかで、デルフォ
イの神託のような / あの靈感の詩行を、各自
感銘深く読み取るとき / あなたは、我らの想
像から自力を奪い、我らには / 有り余る想
いを凝り固まらせ、我らを大理石にする / そ
してその石室に、あなたは豪華に収まっている
 / そんな墓なれば、王者をも死にたく思わせ
るほどに)⁽¹³⁾

この詩は First Folio の序文と同じく匿名で出さ
れ、*On Shakespeare* という題名は 1645 年のミル
トンの最初の個人詩集の出版の際に付けられたも
のである。Second Folio では *An Epitaph on the
Admirable Dramatic Poet W. Shakespeare.* と記

されている。内容は、シェークスピアの名声はその墓碑に刻まなくても永遠に語り継がれ、デルフォイの神託を受けたその詩は我々の想像力を遙かに凌駕するといひ、その石室には王といえども入りたくさしてしまうほどである、と言って終わっている。力強く故人を称える詩は単なる詩集の frontispiece(口絵)に載せる頌歌の域を超えた秀作である。

5. Star-pointing Pyramid

ミルトンがこの碑文をモチーフにした理由は、シェークスピア作品を取り入れることで作者への敬意を称したことと、芸術への理解を示したパトロンへの感謝の念があったと述べた。両作品の共通項を挙げると、まず、aabccdd...と2行ずつ脚韻を踏んでいること、脚韻に同じ語を用いていること(Bones, Stones, Fame, Name)、さらには *On Shakespeare* での4行目“Star-pointing Pyramid?”「星を指さしてそびえる尖塔」と碑文の SKY ASPYRING PIRAMIDS「空にそびえる尖塔」という類似した表現、等がある。

On Shakespeare の4行目“Star-pointing Pyramid?”にある y-という語はシェークスピア作品でもあまり見られない、古典に精通したミルトンならではの表現である。y-を接頭語として挿入するのは古典的な表現であり、16~17世紀からミルトンの時代ではすでに懐古趣味的な語であった。10世紀ごろから使用されていて、ドイツ語の接頭語 ge-に似ていて実際古英語では ge-というスペリング⁽¹⁴⁾であった。使用例は y にハイフンを付けるのと付けないものがある。例えば19~20世紀まで使用例がある yclad(=clothed, dressed)や yclept, ycleaped(=called, named)など使用例の多い語彙はハイフンを付けないことが多い。古典に造詣の深いスペンサーは好んでこの表現を用いて例文数は枚挙にいとまがないが、シェークスピアはこの y-の表現をほとんど用いていない。以下はその数少ない使用例である。

KING: Her sight did ravish, but her grace in speech,

Her words y-clad with wisdom's majesty,
Makes me from wondering fall to weeping joys,⁽¹⁵⁾

(*King Henry VI, Part 2. I. i. 32-35*)

(王: その姿には心奪われたが、いまのあいさつにこもる気品、英知の威容に飾られた言葉には、驚嘆極まって ついには涙が出るほどの喜びを覚えざるをえぬ)⁽¹⁶⁾

Now for the ground, which? Which, I mean,
I walked upon. It is ycleaped thy park.⁽¹⁷⁾

(*Love's Labour's Lost, I. i. 232-3*)

(次に場所の問題に移ります。つまり、私がそぞろ歩きをした場所のことではありますが、その場所はいずれかと申しますと、いわゆる御苑であります。)⁽¹⁸⁾

使用頻度の高い yclad と ycleaped のシェークスピアの使用例は OED ではこの2つだけである。一方ミルトンの同時代作品の使用例は以下の通りである。

But com thou Goddess fair and free,
In Heav'n ycleap'd Euphrosyne,
And by men, heart-easing Mirth,
Whom lovely Venus at a birth
With two sister Graces more
To Ivy-crowned *Bacchus* bore;⁽¹⁹⁾

(*L'Allegro. 11-16*)

(だが、来るのだ、君美しきのどかな女神よ / 天界で呼ばれるその名はユーフロシネ / 心癒すマース(歓喜)と人は言う / 女神ヴィーナスが一度の出産で / もう二人の姉妹美の女神と共に / ツタの冠を被るバッカスが生んだもの)⁽²⁰⁾

But wisest Fate sayes no,
This must not yet be so,
The Babe lies yet in smiling Infancy,
That on the bitter cross
Must redeem our loss;
So both himself and us to glorifie:

Yet first to those ychain'd in sleep,
The wakefull trump of doom must thunder
through the deep,⁽²¹⁾

(*On the Morning of Christ's Nativity*, XVI.
149-156)

(だがとても賢明な運命の神は言う / まだそんな事態になるはずないと / 赤子はまだ微笑む幼児のまま横になる / つらい十字架の上で / 我らの墮落を償い / 自身と我らに栄光を与え / まず最初に眠りに縛られた者たちに / 目覚ましのラッパが奈落にとどろきわたる)⁽²²⁾

シェークスピアは使用例の多い *yclud* と *ycrept* を使ったが、ミルトンは辞書に載っていない *ychain* という語を用いている。これはミルトンの造語、あるいは新語とってよい。つまり、動詞の過去形あるいは過去分詞形に、接頭語の *y-* を挿入することで、受動態の意味を生じさせる用法である。“Yet first to those ychain'd in sleep”は「しかし眠りに縛られた者たちに」と受け身の意味を持つが、実際は *y-* がなくても、*chained* とすれば過去分詞の形容詞形で「縛られる」という意味になる。ミルトンが敢えて *y-* を接頭語に入れたのは、作品に古典の雰囲気を出すことが目的であった。*On Shakespeare* はシェークスピアを称える詩だが、シェークスピアが使わなかった語法 *y-* を4行目“Star-ypointing Pyramid?”で用いている。チョーサーを始め多くの中世の詩人がこの *y-* の表現を用いたが、特にスペンサーは積極的に取り入れた。ミルトンがこの語句を使ったのは、当時からシェークスピアよりもスペンサーに傾倒していたことが原因である。学生時代から古典に没頭していたミルトンがスペンサーの「古語用法」(archaism)を進んで使ったのは自然の流れである。父親の恩恵で *On Shakespeare* を書く機会を与えられ、期待に応える結果を出したが、古典への憧憬が自然と“Star-ypointing Pyramid?”という言葉になって出てきたのであろう。

6. おわりに

本稿では、ミルトンが *On Shakespeare* を執筆す

るために、シェークスピア作とされる Stanley 家の碑文を参照にした経緯を紹介した。出版界に強い影響力を持つ父親に後押しされた形で生まれた *On Shakespeare* であったが、シェークスピアへの賛辞が大仰になりすぎていないことで作品が上品に仕上がっている点で、ミルトンは非凡な才能を発揮したとってよい。同時に、シェークスピア本人は取り入れなかった、古典の伝統に則って先人の作品(碑文)を取り入れる手法を用いて、さらには“Star-ypointing Pyramid?”という古語を使い、ミルトンは *On Shakespeare* に独自性を与えようとしたのだと思う。

注

- (1) Campbell, Gordon. *Shakespeare and the Youth of Milton*. *Milton Quarterly*, p.96 (1999)
- (2) *Elegia prima ad Carolum Diodatum (The first Elegy to Charles Diodati)*
- (3) ジョン・ミルトン『イングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論』(新井明・野呂有子訳、聖学館大学出版会、2003) 395
原文はラテン語。1649年、チャールズ2世処刑後に執筆されたミルトンの革命擁護論であるが、半自伝的要素が強い。
- (4) Campbell. 97.
- (5) 日本語訳は筆者
- (6) 教会及び内部の様子は www.discoveringtong.org/tongchurch.htm で確認できる。
- (7) *Arden Shakespeare Complete Works of Shakespeare*, Richard Proudfoot, Ann Thompson and David Scott Kastan ed. Thomas Nelson and Sons Ltd. (2001) 27.
全てのシェークスピア作品は *Arden Shakespeare* から引用。
- (8) 日本語訳は筆者
- (9) *Arden Shakespeare*. 676
- (10) 『リチャード2世』(小田島雄志訳、白水社、1983) 36.
- (11) 『ミルトン ラドロー城の仮面劇』(私市元宏著、あぼろん社、1992) 第五章
- (12) Stephen Orgel and Jonathan Goldberg, ed.

John Milton: Oxford University Press. New York.
1992. 20. 以下ミルトン作品はすべて *John Milton* から引用する。

(13) 日本語訳は筆者

(14) *Oxford English Dictionary*.

(15) *Arden Shakespeare*. 498.

(16) 『ヘンリー6 世第二部』(小田島雄志訳、白水社、1983) 12

(17) *Arden Shakespeare*. 747.

(18) 『恋の骨折り損』(小田島雄志訳、白水社、1983) 22

(19) *John Milton* 22.

(20) 日本語訳は筆者

(21) *John Milton* 7-8

(22) 日本語訳は筆者